5.　校正の間隔及び手順

5.1.　校正は、表５に掲げる事項ごとに、それぞれの間隔及び基準で行うこと。

表５　校正の間隔及び基準

気候	間隔	基準
温度	年１回	±１K
結露	年１回	±５％RH
周囲圧力	年１回	±0.4kPa
冷却ファン	オーバーホール後	1.1.1.によること

5.2.　分析計の校正手順

5.2.1.　分析計の製作者が定める方法に基づき、表５に掲げる間隔以下で、各分析計を校正すること。

5.2.2.　通常使用する各作動レンジについて、以下の手順に基づき線形化すること。

5.2.2.1.　可能な限り等間隔である５個以上の校正点に基づき、分析計の線形化曲線を求めること。この場合において、最高濃度の校正ガスの公称濃度はフルスケールの80％以上とする。

5.2.2.2.　校正ガス濃度を得るためにガス分割器を使用し、精製N_2又は精製合成空気で希釈してもよい。

5.2.2.3.　最小二乗回帰分析によって線形化曲線を計算する。得られた多項式の次数が３より大きい場合は、校正点の数を少なくとも当該次数に２を加えたものとすること。

5.2.2.4.　線形化曲線は、各校正ガスの公称値との差が±２％以内であること。

5.2.2.5.　線形化曲線と線形化点のトレースに基づき、校正が正しく実行されたか検定すること。この場合において、以下を含む分析計の各種特性パラメータを明記すること。

(a)　スケール

(b)　感度

(c)　ゼロ点

(d)　線形化の実施日

5.2.2.6.　コンピュータ、電子制御のレンジスイッチ等により同等の精度を得ることができる場合にあっては、それらを使用してもよい。

5.3.　分析計のゼロ検定及び校正検定手順

5.3.1.　通常使用する各作動レンジについて、以下の手順に従い、各分析の前に確認すること。

5.3.1.1.　試験前に別紙６の1.2.13.2.3.に基づき、ゼロガス及び校正ガスを使用して校正の確認を行うこと。

5.3.1.2.　試験後に1.2.13.2.4.に基づき、ゼロガス及び校正ガスを使用して校正の再確認を行うこと。

5.4.　FIDのHC応答検査手順

5.4.1.　検出器応答の最適化

FIDの製作者が定める方法に基づきFIDを調整すること。この場合において、最頻使用の作動レンジにおいて空気中のプロパンを使用すること。

5.4.2.　HC分析計の校正

5.4.2.1.　空気中のプロパン及び精製合成空気を使用して分析計を校正すること。

5.4.2.2.　5.2.2.に規定する校正曲線を求めること。

5.4.3.　HCの応答係数

5.4.3.1.　試験用ガスの濃度は、作動レンジについて、フルスケールの振れの約80％に相当するものとする。

5.4.3.2.　試験用ガスの濃度は体積で表された重量標準に対し、±２％の精度であること。

5.4.3.3.　293Kから303Kまでの温度でガスシリンダを24時間静置すること。

5.4.3.4.　分析計の使用を開始したとき及び大規模メンテナンスを行ったときには応答係数を求める。この場合において、校正に使用するガスの応答係数は次に掲げるものであること。

メタンと精製空気：$1.00 < R_f < 1.15$

プロピレンと精製空気：$0.90 < R_f < 1.10$

トルエンと精製空気：$0.90 < R_f < 1.10$

ただし、これらは、プロパンと精製空気の応答係数R_fを1.00とする相対値である。

5.5.　NOxコンバータ効率の測定手順

5.5.1.　図15のとおりに装置を配置し、次の手順に基づき、NO_2をNOに変換するコンバータ効率を測定する。

5.5.1.1.　ゼロガス及び校正ガスを使用し、当該装置の製作者の定める方法に基づき、最頻使用の作動レンジにおいて分析計を校正する。この場合において、校正ガスは、NO含有量が当該作動レンジの約80％に相当するものであり、混合気体のNO_2濃度がNO濃度の５％未満であること。

5.5.1.2.　NOx分析計について、校正ガスがコンバータを通過しないようにNOモードに設定し、表示された濃度を記録すること。

5.5.1.3.　スリーウェイを介して校正ガス流に酸素又は合成空気を連続的に追加し、濃度指示値が5.5.1.1.で得られた校正濃度よりも約10％低くなるまで継続し、表示された濃度cを記録する。この場合において、オゾン発生器は停止させること。

5.5.1.4.　オゾン発生器を作動させてオゾンを発生させ、NO濃度を5.5.1.2.で得られた校正濃度の10％以上20％以下の範囲まで下げ、表示された濃度dを記録する。

5.5.1.5.　NOx分析計をNOxモードに切り替え、表示された濃度aを記録する。

5.5.1.6.　オゾン発生器を停止させ、表示された濃度bを記録する。

図15　NOxコンバータ効率の検定機器構成

